

花の講道館

村松梢風

館道講の化

近世名勝負物語

村松梢風



新潮社版

花の講道館

近世名勝負物語

昭和二十八年五月二十五日 印刷
昭和二十八年五月三十日 發行

定價貳百四十拾圓

地方 實價 貳百五十拾圓

著者 村松梢風

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐藤義夫

印刷者 東京都港區芝三田豐岡町八
川口芳太郎

發行所 東京都新宿區矢來町七一
株式會社新潮社

電話九段(33)一一一五番
振替東京八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷 図書印刷株式会社

製本 藤 専 堂

Printed in Japan

目次

花の講道館……………五

名優船乗込……………五

兩國の川風……………一三

裝
幀
吉
岡
堅
二

花の講道館

— 近世名勝負物語 —

花
の
講
道
館

少年師範代

一

岡山市紺屋町の狭い裏路地を突き當った所に、見るからに古びた家があった。入口に「起倒流柔術指南」という大きな看板が掛っている。憲法が發布され、國會も開かれ、文明開化萬能の明治の時代となつては、こういう看板はひどく時代ばなれのした感じだが、こゝが、幕末維新の頃までは、中國筋きつての剛の者と謳われた野田權三郎の柔術道場であつた。

玄關らしいものもない。たてつけの悪い格子戸を開けると、直ぐ十五疊程の羽目張りの部屋で、そこが道場だ。片隅に骨接ぎの治療道具が置いてあつたり、二階へ上る梯子段があつたりして、實際稽古に使える廣さはせいゝ十二三疊くらいしかなかった。

時代の流れはどうにも仕方がなかった。自然と、柔術だの劍術だのというものは廢れて、よほど物好きな人間でないといふ習いに來る者もない。權三郎はおまけに取る年で、近年は接骨の方でどうやらその日のたつきを支えている始末だから、狭い道場でも間に合つていくのだらうが、それにしては、昔ながらの大看板がいかに物々しくて釣り合わない。いっそのこと、骨接ぎの看板と掛け替へたらとよそ目には思ふくらいだが、やっぱり武藝者としての誇りと見榮は棄てられないのだらう。

朝であつた。權三郎は道場のすぐ奥の居間の縁側で摺り餌を作つていた。その傍の小鳥籠の中では

目白が元氣一杯で飛び廻っていた。一瞬もじっとしていないが、權三郎が舌の先でチチと啼き眞似をする、目白は飛び廻るのを止めて、チチと應じて、餌を作っている飼い主の手許を覗き込むように、小首を傾げる。

「もう一寸だから辛抱しろよ」

權三郎は子供に話し掛けるように云って、慣れた手つきで摺り餌を作り續けている。やがて出来上った餌を餌壺に盛り、水入れの水も新しいのを取り替えて、籠の中へ入れてやると、目白はさも待ち兼ねていたという風で、勢よく餌をついばむのだった。

數年前に妻子を失くし、老後を淋しい獨身で送る權三郎を慰めてくれる者は、目白くらいのもだった。

暫くの間小鳥籠を縁側の上に置いて眺めていたが、やがてそれを朝日の當る柱に掛けた途端、「御免」と表でおとずれる聲がした。

「誰じゃ」

權三郎はその場から大きな聲で答えた。すると今度は格子の開く音がして、「當道場の御主人御在宅ならば、お目に掛りたくて参った者です」

若々しい凛とした聲だ。

權三郎は出て行つた。髪のも髯も殆んど白いが、眼光は鋭く、五尺七八寸ある、六十年來柔術で鍛えた體軀はさすがに朧かりしたもので、蹴立てるような足取りで道場の方へ行つて見ると、紺紵の筒袖の着物に、黒木綿の袴、朴齒の下駄を穿いた一人の若者が、柔術の稽古着を帶で卷いたのを無造作にぶら下げて立っていた。

「いずれからお出でじゃ」

「僕は講道館の馬場七五郎と申す者です。先生の御高名を承って、御指南に預りたくて参りました」

二

他流試合だ。

その言葉を聞くと權三郎はちょっと厭な顔をした。青年時代から、他流試合は何百回やったか分らない。そうして鍛え上げて來たわざである。また勝負で明け暮れして來た生涯である。だから他流試合と聞いて別に驚きもしないが、近年はもう久しくそんな相手も來なかつた。この年をして、若い者を相手に他流試合を争う氣持も實際ないが、訪ねて來た相手が、噂に聞く講道館の者だと聞くと、妙な反感のような鬨志が湧いた。それに武藝者として、看板を出している以上、他流試合を斷わる言葉はないが、年こそ老いたれ、實力でも、これしきの若者にひけを取るようなことはない。

「上らっしゃい。わしが野田權三郎じゃ」

「御免」

馬場は軽く一禮してから道場へ上つて來た。六七尺離れて對坐した。

「講道館流と云われたな」

「はい。嘉納治五郎先生の講道館で學んで居ります」

「嘉納さんは、大學を卒業され、學習院の教頭にまでなられたと聞いたが、それほどの學者が、柔術の道場を始めるなどとは、よほど變つたお人じゃのう」

「柔術ではありません。講道館では柔道と云います」

「どうして柔術ではないのじゃ」

「やわらは單なる術ではなく、精神を鍛錬し、人格を向上せしむる道であるというのが、嘉納師範の主張なのです」

「なるほど。じゃが、柔術にしろ、柔道にしろ、強くなって、相手に勝たなくては駄目じゃろう」

「そうです。強くならなくてはいけません。而も正々堂々と闘って、勝敗を決するのが、講道館の柔道です」

「あんたの話を聞いてみると、柔術の方は、正々堂々でないように聞えるな」

「いや、そういう意味ではありません」

と馬場七五郎は少し赤い顔をして訂正した。權三郎は苦笑を禁じ得なかった。學者というものは何でも一理窟つけないと氣が濟まないらしい。昔から武士が表道具としてやって來た柔術、劍術だ。武士道で磨き上げて來た柔術を、今更柔道と云い直さなくてもよからう。

「先生、早速御指南に預りたいのですが」

馬場は性急に云った。權三郎は自若として、更に尋ねた。

「失禮じゃが、馬場さんと云われたな、あんたは講道館で、どういう免狀を取って居らるるのか」

「僕は講道館の二段です」

もうこれ以上話すことも聞くこともない。權三郎はあまり氣は進まぬながら、この少し思いついてゐるらしい、世間知らずの若者の、天狗の鼻をくじいてやらねばなるまいと思つた。

支度に取り掛ろうと思つてゐるところへ、格子戸をガラ／＼と開けて

「お師匠様、只今いつて參りました」

と聲を掛けて、ズカ／＼と道場へ上って来た少年があった。

三

「おゝ、英之、戻って来たか。丁度よいところじゃ、此所へ来い」

少年は、何かお貸いにも行つて来たらしく、風呂敷包みを持っていたが、それを羽目際へ置いて、來客と斜めに向き合う位置に坐った。

見たところ、十六位の、頬の紅い、眼の涼しい美少年で、丈もあまり高くない。

「馬場さん、御紹介します。これは拙者の門人で、三島英之という者です。お見知りおき下さい」

「僕は講道館の馬場七五郎です」

「三島英之です」

直ぐにこの場の空氣を知つて、少年は昂然として答えた。

「わしがお相手をする前に、三島と一本勝負をして貰いたい」

「承知しました」

他流試合には、始めに門弟を出すのが昔からの定法である。

「御覽の通り、これはまだ年もゆかず、體も小さいが、わざは一通り教えてあるつもりじゃ。小僧と思つて手加減をしないで、あんたのいわゆる正々堂々の勝負をして下さい」

「は、試合となれば、たとえ相手が少年でも手心は致しません」

「手心などされたら、わしの方で御免じゃ」

と英之はムツとして突っ掛るように云つた。こんな奴に負けるものかと、試合となると、英之の體

は闘志で二杯になった。

三島英之は十六歳であつた。岡山市の忍町で生れた彼は、七八歳の頃から野田道場へ通つて柔術を習っていたが、師の權三郎が孤獨の境涯になつたので近年は唯一の内弟子として住込み、恩師のために薪水の勞を取っている。體は小柄だが、野田道場の麒麟兒といわれ、いまでは立派に師の代稽古が勤まる、權三郎の祕藏弟子であつた。岡山市中でも、三島の浮腰にかゝつては、かなう者は一人もいなかった。

「英之、馬場さんは講道館の二段じゃ。そうな。貴様も必死で掛れ」權三郎は勵ますように云つた。すると英之はそっぽを向いて、二階へ上る梯子段を下から數えるような風をして見せた。

「二段というと、まだ上に澤山段がありますね」

この不敵な言葉に、さすがにくつと來た様子だったが、感情を抑えて笑つた。

「口の悪い少年だなあ。他流試合に段などはない。勝負は時の運だ。君も全力を盡して闘え」
「違ふ。時の運じゃない。勝負は強い方が勝つにきまつてゐる」

「問答無益だ！ 早く支度をしろ！」

英之の際限もない減らず口に、馬場は到頭カツとなつて呶鳴つた。

英之は平氣な顔をして二階へ上つて行つた。今迄にも、自分よりはるか年上の他流の人と試合をした経験も幾度びもある、が一度も負けたことはない。だから今度も簡単に勝てると思つていたし、必ず勝つて見せると心に誓つた。

稽古着を着てしまうと、ダダダッと梯子段を駆け下りて、道場の眞中へ坐つた。

權三郎は上座に坐つて軽く眼をつぶっていた。

馬場は悠然と相手の前へ出て來た。双方一禮。

「いこうッ！」

同時に云って立った。

四

馬場は右自然體にかまえて、仁王立ちになった。英之は左自然にとつて、眈眈と虚を狙って動かない。

起倒流は立技（たちわざ）が主で、寝技（ねわざ）が従だった。

馬場はその虚を突いて、寝わざで打ちとろうとしているのだが、三島はその手に乗るかとはかり、腰を落して動かない。五分、十分、二十分――

馬場はこの少年が、容易ならぬくせものであることを看破したので、少しも油斷しなかった。じつくりと構えて、機（はかり）の到來するのを待っている。が、悲しいかな英之は若いだけに、だん／＼焦れついて來た。馬場は冷たい微笑さえ浮べて、じり／＼と寝技へ誘い込もうと迫って來た。英之はま／＼とばかり、遮二無二組み付いて、得意の起倒流の浮腰に打っ取ろうと、攻め掛った刹那、

「おゝ！」

と受け流しておいて、馬場は英之の體が立ち直る途端の、虚を突く足拂いの一閃！

「えい！」

と、かけ聲諸共、英之の體は、ドッと畳の上へ投げ出されていた。

「くそッ！」

英之の眼はギラ／＼と血走った。起き上りざま飛び掛っていったが、今度は馬場の投げがきまって、大きく圓を描いて、ものの美事に投げ付けられてしまった。

「参りました」

英之はキチンと坐って頭を下げた。

口惜しくても、實力の差はどうすることも出来なかった。さっき自分が憎まれ口を叩いた「勝負は強い方が勝つ」まさにそれだった。熱い涙が止めどなく頬を傳って流れた。

師の權三郎も一言も發し得なかった。自分が出れば眞逆負けはしまいが、彼は馬場を相手に勝負をする氣がなくなった。それほど講道館流の理詰め、戦法に見とれてしまったのだった。

「お美事じゃ」權三郎は初めて溜息をつくようにして云った。

「いや、幸せな事でした。三島君の鋭い浮腰には、やられたと思いました」

暫くすると、權三郎は坐り直して云った。

「馬場さん、野田權三郎から改めてお願いがあるが、聞いて下さるだろうか」

「僕で出来る事でしたら、何なりとも」

「この三島英之のことです。わしはこいつに本當の修業をさせたいのです。お笑いかも知れぬが、わしは英之を日本一の柔術家にしたいと多年念願したのじゃが、只今のあなたの試合を見て、もう起倒流では駄目じゃということがよく分りました。ついては英之を講道館へ入れて頂いて、十分勉強させたいと思いますが、わしは田舎者で嘉納さんとは一面識もない。どうかあなたが東京へ歸られたら、嘉納先生に、野田權三郎という田舎の武藝者の、一生のお願いじゃということをお口副え願いたいのです。じゃ、いかゞでしょう」